

手銭美術館蔵『愛屋免日記』繙読（上）

——小豆沢常悦の杵築歌壇指導（一）——

久保田 啓 一
（広島大学名誉教授）

摘 要

手銭美術館には、近世中期以降の文芸関係資料が数多く蔵され、手銭家歴代が杵築の地で展開した文芸活動の詳細を知ることができ。本稿では、三代手銭白三郎季硯が属した杵築歌壇の実態を如実に知り得る資料として、季硯自筆の『愛屋免日記』の本文を校訂して掲げ、その記述の意味するところを歌壇史的観点から読み解く。その際、本書に貼り込んである、季硯達を指導した松江の小豆沢常悦筆かと推測される文書の断片は、指導する常悦の問題意識を明確に伝える点で価値があり、それを受け止める季硯側の反応にも留意しながら、季硯による記述の意味を明らかにしていく。

本文を二回にわたって掲載した後、記述の順に沿って詳細な繙読を試みる。

キーワード：手銭美術館、手銭季硯、小豆沢常悦、愛屋免日記、杵築歌壇

はじめに

二〇一三年から一九九九年にかけて、手銭美術館（旧 手銭記念館）所蔵の近世和歌関連資料の調査を許され、自らの関心の所在に基づいて検討を進めた結果、個別の資料の持つ意味の重さもさることながら、

手銭家和歌資料が示す歌壇史的な価値に気付かされた筆者は、調査結果を踏まえたいくつかの見通しを発表することができた¹⁾。本稿の出发点を明らかにするべく、その骨子を以下に掲げる。

① 手銭家歴代のうち、和歌の愛好ぶりが資料で裏付けられるのは、三代季硯、四代敬慶、七代有頼とその妻との子の時代である。即ち、手銭家の和歌活動には、一八世紀後半と幕末の二つの盛期

が存在するということである。

② 季硯には和歌・俳諧・漢詩の書留が多数残されるが、漢詩と俳諧が主で、和歌活動は明和九年頃から本格化した。和歌の師は小豆沢常悦。季硯の弟長康(俳号冠李)や四代敬慶、俳諧の指導者広瀬百羅らも指導を受けている。彼らには漢詩・和歌・俳諧を区別する意識が乏しく、常悦の没後は百羅が和歌の指導にも当たった。特に、釣月から指導を受け、二条派堂上歌学を出雲に伝えた小豆沢常悦の存在は大きかった。

③ 七代有軒とその妻の子の和歌の師は中臣典膳であるが、典膳は俳諧・狂歌にも指導力を発揮した。特に、和歌詠草に施す「面白候」などの褒詞を、点取俳諧で用いられる点印そっくりの印鑑に仕立てて捺すなど、和歌と俳諧の位置を完全に一体化させる意識で臨んでいる。幕末には、和歌・俳諧・漢詩に狂歌が加わり、まさに韻文の各領域を横断するような形で享受されていたことが特筆される⁽²⁾。

本稿では、以上の総括を細部にわたって支える個別の資料の詳細な検討に踏み込みたく思うが、特に、手鏡家の文芸活動が本格化した三代白三郎季硯(正徳二年(一七一二)生、寛政三年(一七九一)五月二日没、八〇歳)の活動に焦点を当て、季硯が属した杵築歌壇の内幕を窺うに適した資料を順次取り上げることとする。季硯達の活動に指導者として深く関与したのが松江在住の小豆沢常悦であり、手鏡美術館には常悦の積極的な指導の跡を精密に留める資料がいくつか伝存するため、常悦との関わりで杵築歌壇の実態を探ることが有効な方法であることは明らかである。本稿を始めとする一連の論述に「小豆沢常悦の杵築歌壇指導」との副題を加えるのも、常悦を通して季硯達を

眺める視点を一貫させたいとの思いに拠る。

最初に取り上げるのは、季硯自筆の歌学ノートというべき『愛屋免日記』である。書誌の詳細は後述するが、本書の特徴は、常悦筆かと推測される文書の断片が豊富に貼り込んであり、季硯の受けた指導の跡が生々しく蘇るところにある。その貼紙や季硯自身による書き入りを精密に読み込んで行けば、季硯の問題意識の深化や拡がりを体得できるであろう。本稿の標題の末尾を「翻刻と解題」とはせず「繙読」としたのも、可能な限り季硯と常悦の意識に肉薄するように精読したという筆者の願いを託した故である。

小豆沢常悦について

小豆沢常悦の事績を網羅するような研究はまだなされていない。伝記研究の基本資料としては、森繁夫氏編・中野莊次氏補訂『名家伝記資料集成』第一巻(思文閣出版、一九八四年二月一日発行、一九九一年二月一日再版)があり、次のような記述が見られる。

七九一 小豆沢勝興^{アツキザバカウオキ} 出雲松江の人 宝永三丙戌年(二三六六)

生、安永五丙申年(二四三六) 六月二八日歿 七一歳

称浅右衛門 号常悦、百忍庵、転幽斎 法名 百忍庵禪翁常悦上座

水災飢饉の際私財を献ず、初明珠庵釣月門、澄月門後、老後京師に遊寓し武者小路実岳に師事す、

・鳥根評論四三号四一 ・出雲国名所歌集初編二一

・出雲私史卷之十二 ・鳥根教育 郷土展覧会 出品物

解説二六⁽³⁾

没年月日と法名が明記されるので、森氏が常悦の菩提寺に関する情報を入力していたのは間違いない。国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』（汲古書院、一九九〇年三月二〇日）も全面的に依拠する。

ちなみに、松江市史編集委員会編『松江市史 史料編8 近世Ⅳ』（松江市、二〇一六年三月三〇日）の第八章「学びと教育・文化の展開」第四節「文芸・遊芸の世界」に、明治大学博物館蔵小豆沢家文書の史料が翻刻されており、この中に「天明二年五月 小豆沢常悦追善詠歌」として、観時庵恭珍が常悦の七回忌を前に詠じた和歌が収められる。その詞書の冒頭に、

惟時天明二水無月末の八日は高師常悦禪師、世をはやうく給て
より月日はほともな、とせにめくる車のわかれを（以下略）^{（4）}

とある。「世をはやうく給て」は「世をはやうし給て」が正しいと推測されるが、この記述により、天明二年（一七八二）から遡ること七年の安永五年（一七七六）六月二十八日に常悦が没したことが同時代の資料で確認されるのは有り難く、森氏の記述の信憑性は高い。

なお、松江市史編集委員会編『松江市史 通史編3 近世Ⅰ』（松江市、二〇一九年三月二五日）の第三章「城下町松江と在方町」第二節「都市住民のなりわい」三「御用商人―小豆沢家」には、松江で財を成した小豆沢浅右衛門家の活動が詳述されている。常悦の文学活動を正しく受け止めるには、小豆沢家が松江の地で如何なる立場を確立したかが前提として問われなければならないが、その基盤が得られた意義は大きい。

続いて常悦に関する近年の研究を一覧しておく。

蒲生倫子氏「江戸時代の松江藩における「歌道伝授」の研究」（『島大國文』二五号、一九九七年二月二八日）は、常悦が師釣月から伝授

を受けた状況を明記する『伊勢物語口決』と『源氏物語三箇之大事』の奥書を日御碕神社小野検校家文書の中から見出して紹介する。常悦の歌学の内実を探る点で重要な業績となっている。

芦田耕一氏『江戸時代の出雲歌壇』（今井出版、二〇一二年三月三一日）第二章「江戸時代前、中期の出雲歌壇」二「明珠庵釣月」項は、釣月の活動を概観するとともに常悦にも言及する。

田中則雄氏「手銭家蔵書と出雲の文芸活動」は、〈拙稿①〉（シンポジウム①）^{（1）}を収める報告書に収録されたもので、手銭家歴代の活動を蔵書形成の観点から総括する。三代季硯との関わりにおいて常悦にも触れるところがある。

〈拙稿①〉では、『愛屋免日記』の他、『安永二卯月三日開講 百人一首聞書 季硯』（資料番号 四九四）、『高角社奉納百首和歌』（資料番号 四八五）などの内容を検討して、杵築歌壇における常悦の指導ぶりの一端を明らかにした。また、〈シンポジウム①〉では、前述の資料に加えて点取和歌の原詠草にも言及し、歌壇活動の内実に踏み込むよう努めた。本稿では、以上二編の記述を前提として、『愛屋免日記』以下の資料の全貌を示しつつ、さらに詳細な解説を試みる。二編のご参照をお願いしたい。

注

- 1 久保田啓一「手銭家歴代の和歌活動―歌壇史上の意義を中心に―」（『出雲文化活用プロジェクト編』『手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業 平成二六年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書』、公益財団法人手銭記念館、二〇一五年三月三二日）〈拙稿①〉、田中則雄・芦田耕一・久保田啓一・伊藤善隆・佐々木杏里「シンポジウム 江戸力×手銭

家蔵書から見る出雲の文芸」(同右)〈シンポジウム①〉、久保田啓一「杵築歌壇資料が語るもの——和歌史の見直しのきっかけとして——」(出雲文化活用プロジェクト編『手銭家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業 平成三十一年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書、公益財団法人手銭記念館、二〇二〇年三月三二日)〈拙稿②〉、野本瑠美・佐々木杏里・田中則雄・昌子喜信・久保田啓一・伊藤善隆・小林准士「シンポジウム 資料から再発見する江戸時代の底力—手銭家資料(文書・古典籍・美術)を繋ぎ活かす取り組み—」(同右)〈シンポジウム②〉。以下、これらに言及するに当たっては、〈拙稿①〉等の略称を使用する。

2 〈拙稿②〉一四頁。

3 同書八〇〜八一頁。

4 同書八〇一〜八〇二頁。

『愛屋免日記』書誌

本稿で扱う『愛屋免日記』の書誌は以下の通りである。

手銭美術館所蔵。資料番号五二五。半紙本一冊。写本。袋綴じ。料紙、楮紙。表紙、紺色地に横刷毛目模様。縦二二七糎、横一五九糎。外題、表紙左肩に題簽「愛屋免日記」。内題、なし。表見返しに貼紙。本文、五七丁。うち墨付五六丁、白紙一丁(第三丁)。後表紙から剝がれた裏見返し表裏にも記載あり。一面行数、概ね六〜九行で不定。和歌、二行書き。本文は季硯自筆。季硯筆・他筆の貼紙多数あり。

凡例

- 一、漢字は、常用漢字・人名用漢字に含まれるものはそれを用い、他は正字体とした。ただし、「伊呂波寄」(9オ〜11オ)に限り、字母の各字体を示す必要があり、異体字・旧字体・俗字をも使用した。
- 一、平仮名は現行の字体に統一した。片仮名は、漢字・平仮名による記載の中に表われる「ニ」「ハ」「ミ」を「に」「は」「み」に直した以外、底本通りに生かした。
- 一、適宜句読点・濁点などを補った。
- 一、踊り字は、底本通りとした。
- 一、「〆」などの合字は、「より」のように開いた。
- 一、明らかな誤字には、その右に正しいと思われる文字を()に入れて補った。
- 一、底本の本文に疑問のある箇所には、その右に(ママ)を付した。
- 一、底本の本文に施された修正前後の異同については、和歌表現に関わるものを除き、修正後の形を示すのみとした。
- 一、和歌に添削による修正が施されている場合は、修正前の形をまず示し、次に修正後の形を()に入れて示した。修正が二度以上に及ぶ場合は、修正の順に従って配置し、一番左の和歌をもって最終形とした。
- 一、底本の行移りには従わなかった。
- 一、底本の丁移りは、「(1オ)」のように示した。
- 一、底本に多数見られる貼紙による修正・補記については、貼紙の下の本文をまず掲げ、その後、(貼紙)とした上でその記載内容を

枠内に入れて示した。半丁ごとに貼紙の内容を示すが、半丁内に複数の貼紙がある場合は、下から上、右から左の順に(貼紙①)(貼紙②)と番号を付して区別した。なお、見開き一丁に貼紙がある場合も同様の処理を行い、丁移りの表示によって見開き一丁と分かるようにした。

一、本文校訂に関する説明など、筆者が便宜上加えた記述は、()に入れて示した。

一、本文掲載の後、内容に関する筆者の見解を「繙読」として加える予定である。

(表紙)

愛屋免日記

(表見返し) (貼紙)

八月三日迄に
晴夜月
八月八日迄に
葛紅葉
八月廿四日迄に
山秋夕

(本文)

明和九卯月三日

於茂竹庵会合

松方会制度

一 毎月会日、八日、十八日、廿四日に議定之事。

但、十八日は本式、廿四日内会也。

一 会日、巳刻より、無遅之参集之事。

但、弁当可致持参候。近隣之会頭たりとも、食事に帰宅可為無

用事。」(1才)

一 会頭心遣無用に候。茶計差出可申事。

一 当座之詠草紙中折二帖、会頭より差出可申事。

但、本詠草箱折は可致持参事。

一 会日故障之人は、前日又は会日朝迄に会頭へ断可有之事。

一 会頭順番に相勤可申候。若当番無抛差合之節は、次へ相頼、振替

「(1ウ)可申事。

一 会合之翌日、会帳無遅滞次之番手へ相送可申事。

一 指合に而出席無之面々は、当座之題ヲ申請、宿に而出詠仕候儀、可

為無用事。

一 会日、俄に会頭差合之儀有之、会日ヲ余日に振替候儀、是迄度々有

之候。制法乱之儀故、此後決而不相成事。

一 懐紙、小鷹之外不相成事。」(2才)

一 老師へ音物等之儀、年行事より諸事相調可申候。当年之行事は正至

相勤之事。

町連中実名

藤間九左衛門藤安 藤喜政懿 石玉政虎

山根氏周迪 西神政常 長美朝真

白兵長康 岡六正至 藤儀藤匡

岡彦正辰 藤大義彦 栄道松林寺

包信山根右膳」(2ウ)

(白紙)「(3才)(3ウ)

武者小路三位実岳卿 十三回忌 兼題 秋懐旧 七月

一芝山故中納言重豊卿 七回忌 秋月 秋夢 兼題 八月

一初学和歌式 和歌庭訓抄 耳底記」(4才)

会合案内状

明何日、月次之和歌、於私宅会頭相勤候間、已刻より御参集可被成候也。

月日 某

帳順次第不同御免」(4ウ)

五月廿四日 六月十八日 六月廿四日

杜夏草 山裏蟬声 夏船

七月十八日 七月廿四日 八月十八日

径女郎花 名所萩 外山月 二首

八月十八日 八月廿四日 九月十八日

秋別恋 二首 山秋夕 蔦紅葉

十月十八日 十一月十八日 十二月十八日

林葉不残 鞆中霜 歳暮梅

九月廿四日 河辺霧

十月廿四日 谷残菊 橋行客

赤人法楽月次 兼題

七 社頭早秋 八 鹿声遠
九 晴夜月 十 河上時雨

十一月廿四日 山家冬月 十一 雪中客来 十二 春漸近

十二月廿四日 水江雪」(5才)

(貼紙)

每月三日 赤人社法楽兼題

七月三日 社頭早秋 八月三日 鹿声遠

九月三日 晴夜月 十月三日 河上時雨

十一月三日 雪中客来 十二月三日 春漸近

此分、前月三日に詠艸差出し可申事。

每月十八日

六月 山裏蟬声 七月 径女郎花

八月 二首兼題 外山月 秋別恋

九月 蔦紅葉 十月 林葉不残

十一月 鞆中霜 十二月 歳暮梅

此分、前月八日に詠草差出し可申候。

每月廿四日

五月 杜夏草 六月 夏舟

七月 名所萩 八月 山秋夕

九月 河辺霧 十月 谷残菊 橋行客 二首兼題

十一月 山家冬月 十二月 水江雪

此分卷、其当日迄二差出ス。

「(4ウ)(5才)

淋しきは秋にあらねど知られけり鳴たつ沢のむかしたづねて

浦夏月

百忍庵

前後明

此度

須磨の浦やよせかへる間もなつの夜はなみ爰もとに明る月かけ

沢蜩

同

六分ト也

主親師出席なれば同ノ字書、常会ニハ同ノ字なし。父格別之興行なれば、子として同ノ字書事もあり。

いかばかり沢の蜩はうき草の露をば露と見するひかりに

軒橘(5ウ)

同

先ノ明キ四分トス

たち花のかほる軒端の草葉までむかし忍ぶの名こそしるけれ

春祝

同

何日同詠寄神祇祝

和歌

八重がきの神代の春もへだてなくおもかけこめてたつかすみかも

初秋霧

同

頓

題ノ墨継一字く

ほのかにも峰の朝ぎりやがてまたたちうづむべき初秋の空

峰帰雁(6オ)

同

詠ノ字少ふとく

和歌少ふとく

下明四分ト也

月も日もうすくかすめる峰越てゆくゑやいかに春のかりがね

七夕同詠織女惜暁

倭歌

九字

権大納言藤原光広

まち得てもまれのあ(6ウ)

ふせの天河かへ

るさなれやしにを

りゆく

本書藤安ニアリ(7オ)

このまゝにかみやち

十字

上明六とせをまもるらん君

分也

九がおさめてしづかな

三

類世遠

」(7ウ)

万葉二て

先ノ明四分トス

古歌

捨る身も世をおさまれと思ふ哉しづかならねば隠れ家もなし

加刀杖瓦石念仏故忍 寂蓮

ながき夜に窓うつ雨のおとせぬはうき世を軒の忍ぶなりけり(8才)

似雲

露の身をおくばかりなる草庵をむすばんとすれば山風ぞふく

同

いちはらに替てすみこし爰もまたうき世のさがと嵐ふくなり(8ウ)

伊呂波寄

い	以	伊	意	委	異	已	ろ	路	呂	爐	露	爐	
は	半	端	破	波	葉	者	に	耳	荷	尔	尔	耳	仁
ほ	保	甫	浦	方	歩	保	へ	邊	遍	部	舳	返	邊
と	東	登	徒	途	渡	土	ち	遲	地	知	馳		
り	里	裏	離	理	梨	離	ぬ	努	奴	怒	駑	(9才)	
る	留	類	流	流	累		を	越	緒	遠	乎	越	
わ	和	輪	倭	話	王		か	賀	可	家	香	加	
よ	夜	豫	与	餘	代	預	た	堂	他	田	陀	太	
れ	連	例	禮	鈴			そ	楚	疎	曾	祖	蕪	
つ	律	津	豆	都			ね	祢	音	根	念	鼠	(9ウ)
な	那	南	奈	名	納		ら	羅	頼	来	亂	良	
む	無	務	夢	謀	武		う	右	有	雨	憂	烏	
る	井	易	違	位	為	闍	の	乃	能	野	能	之	農

お於男雄尾穩 　く具宮貢空究久
や屋哉射也谷 　ま満間真磨麻末

┌(10才)

け気希解夏遣計 　ふ布普風扶付不
こ古湖粉固居己 　江え會縁枝依得
て傳手亭底帝天 　あ愛阿哀案安
さ散作舍砂狭佐 　き幾喜鬼婦析奇
ゆ遊夕弓湯猶由 　め免目命女明妻

┌(10ウ)

み美見身味御未 　し新思私姿至志
ゑ衛栄永穢懷恵 　ひ披非疲肥火比
も裳茂母最藻毛 　せ勢施前是情世
す須寿守数種寸 　京経教輕敬兄

┌(11才)

(白紙)┌(11ウ)

秋懷旧

及なき袖にも露のかゝるかな過こし秋のむかしがたりに
花にしたひ鳥に忍びてあきは猶月のむかしの人ぞ恋しき

(貼紙①)

此御歌、先日いかゞの様に承候処、今日とくと吟味仕候処、よく候
様に承候。此分御出し被成可然候。しかし、したひと忍びと同心に
而御ざ候。此所もし難にとも可相成哉、難計候。愚意に難決候。老
師の御批判御伺可被成歟。

杜夏草

旅人の従がふひまもなつの日にしげりあひたるもりの下艸
(かち人の従がふひまもなつ草のしげりあひぬるもりの下道)

(貼紙②)

旅の題にあらずして旅人など詠じ候事、不可然よし也。歩人^{かち}と被成可然歟。

草の名は何とわかちもなつの日にしげみ涼しきもりの下かけ

(草の名は何とわかちもなつの来てしげり涼しきもりの下かけ)

両首ともに夏の日の日の字、何之用なく候歟。

夏来ればしげれるまゝに露置ておのれ涼しき杜の下艸

(夏来てはしげれるまゝにおく露もふかく成行杜の下艸)

夏草をかりのまくらに賤の男が寐みだれ髪もはづかしのもり

「(12ウ)

(貼紙①)

ケ様に取まはしかしこく作りたる歌は、毎度心の俳諧と御批言御座候。是等全庶幾ならぬ風体と愚意には奉存候得共、御稽古のために御座候間、一向御出し被成、御批判御受候上、御覚語^御可被成候事歟。

夏の日のてりわたれども露はまだつらぬく玉をもりの下草

(貼紙②)

此歌難調様に承候。下の句、別而つゞき不申候。貫くの所詮も曾て不相聞候。御改作可然候。

「(13オ)

夏草 五月十八日会 当座

はらはしな秋より先にをく露の色も涼しき庭の夏艸

こゝろには花もありけり夏草のしげれる色にあきは見えねど

(こゝろには花もやあらん夏草のしげれる色にあきは見えねど)

藤間藤安のぬし身まかりにけるをいたみて」(13ウ)

影したふ行ゑやかにかつら男のくもがくれにし短夜のそら

月日の雲がくれ、はゞかりある事のよし承候。

とゞめてもとまらぬ水をあすか川ふちせ定めぬ人の世の中

哀傷うすく候にや。

へくれなるにふり出て鳴ほとゝぎすなれとなみだをくらべてや見ん

「(14オ)

へきのふまでかたりくらせし人だにもけふのむかしとなるぞはかなき

なき人とおもへば袖にさみだれのふることの葉を聞につけても

(なきあとに袖ぞぬれそふさみだれのふることの葉を聞につけても)

一二句不調候故、三句へ移ル処道理通微致しがたく御ざ候か。

夏草」(14ウ)

花の咲秋はあれどもなつ草のしげれる色をさかりとや見ん

(さく花の秋はあれどもなつ草のしげれる色をさかりとや見ん)

新題林、夏草、実陰公御歌と等類に相成可申候。政常へも及相

談候処、是も等類に相成可申と申候。

杜夏草

何々と其名わかちもなつ草のしげり涼しきもりの下かげ」(15オ)

(貼紙)

なに〜と申初五文字、俗に聞え候様に奉存候。

其名わかちもと申一句、殊外つまりたる句にて御座候。此類を手づ、と申て嫌ひ申事のよし。

草の名の何とわかちも見えぬなどは、多く春草のうへによみならはしたる事にて、夏草には作例不及承候歟。名もなき草とは作例も可有御座候。

此御歌一体の趣向、庶幾ならぬ体ゆへ、詞がら何ほど粉骨をつくされ候而も、さしたる歌にもなるまじくやと奉存候ま、一向思召すてられたく候歟。

一二句よろしからず。三句以下はよろしく御ざ候歟。猶御捨難被成候は、一二句今少御あんじ被成度候歟。

┌ (15ウ)

(貼紙) (二紙を料紙に貼り二つ折りにして16オ・ウとする)

先達之金言、老師之教誡、承候事、少ばかり申上候。

玄旨公曰、只歌は正風体によむべし。いろ〜にまはしてよむはまざらかし物也。

又曰、只直にすらりとよむべし。

又曰、まづろくによむが肝心也。おもてから裏へ行たるがよき也。

又曰、聞えやすきがよき也。

又曰、風体肝要也。めづらしくなければ、風をさへよくよみゆけ

ば、自然に歌よく成也。

┌ (16オ)

頼阿公曰、歌はやすらかに、こと〜しからず、うつくしくつ〜くべし。

清水谷実業卿曰、歌は珍敷希逸体おもしろくなど心にかけて候事なく、道理よく聞え、風体いやしからぬ様によむべし。

儀同三司実陰公曰、歌はよくよまんとおもふが魔也。

右は御工夫のたよりにもやとかいつけ申し候。

┌ (16ウ)

八月十五夜

あかなくに愛る心もくもりなき月のかつらの花の盛を

いのりても猶祈るぞよ神がきの松のこずへの春のさかへを

首夏 五月廿四日会 当座

長かれとおもひし春もや、くれて今朝は若葉の色ぞ涼しき

(長かれとおもひし春もはやくれて今朝は若葉の色ぞ涼しき)

(長かれとおもひし春もくれてはや今朝は若葉の色ぞ涼しき)

┌ (17オ)

きのふけふ春のかたみとちり残る花の中にも夏は来にけり

続古今 後京極

けふこそは庭にや跡のいとはれんとへかし人の花のさかりを

花の盛を人のとへかしとあるべきを、上下になりたるにてめで度聞

ゆる也。」(17ウ)

五句金玉と言ふ事、五句ともすぐれて名句なるを言ふ。

新古 後京極

きりくす鳴や霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん
此歌、五句金玉と言ならはせり。これ五句ともにめづらしからぬ言葉
なれど、(18才)言葉のつゞけがら、句作などのめでたきによりて、
五句ともに金玉をつらねたるごとくなり。前にしるせる製の言葉は皆
金玉也。

谷花

常悦師

花なれやきそのみさかの谷風もおとせず空にのぼる白くも」(18ウ)

寄雲恋

こゝろなき雲をたぐひと見るさへやおもひ乱るゝ夕ぐれのそら
真如マコト十相之歌にてよし。

往かへる波さへ夏のうなばらに海士のをぶねのかずもさだめず
(往かへる波さへ夏の海の上に海士のをぶねのかずもさだめず)
行ゑいかに波路遙に漕ふねのみるめはてしもなつのうなばら
(行ゑいかに波路遙に漕ふねのはてしもなつの海のしづけさ)
「(19才)

朝夕のいとまもなつの海の上に世わたるわざを海人の釣舟
(ながめやるはてしもなつの海の上に世のいとみや海人の釣舟)
うなばらやはてしもなつのゆふ洋にみるめ涼しきあまの釣舟
行ゑいかに波路遙に漕ふねのはてしもなつの海のしづけさ」(19ウ)

(貼紙①)

ながめやるはてしも——

此歌も夏の字只一字出候のみにて、夏の季よはく、不足に御ざ候ゆ
へ、夏の景気の歌とは不聞候。あまの釣舟は雑也。

手銭美術館蔵『愛屋免日記』繙読(上)——小豆沢常悦の杵築歌壇指導

(二)——(久保田啓一)

三五

行ゑいかに——

此歌も同様也。夏の海のしづけさとはかり有ては、春の海にもか
よひ申候。春水舟如座天上、秋水与長天一色など申所にかよひて、
夏の歌に決する所よはく、不足に相聞申候。扱又此行ゑいかにと
申五文字、殊外草臥に聞え申候。此体の五文字庶幾すまじきよし、
毎々御批言御ざ候。愚評狼籍、御免く。

(貼紙②)

ゆきかへる波さへ——
へかへる波とは詠候。又へ立かへる波 へ立さはぐ波 へ波のたち
み へたつ波 いづれも作例有べし。へゆきかへる波 不聞馴詞に
御ざ候。扱又此歌、波さへなつのと御座候は、波のたゝぬ事にて、
夏汗の心と相聞申候。しかし歌には歌の趣と申事御ざ候而、海など
にも春の海は長閑にかすみて朝汗夕汗の体專によみ申事也。夏はは
れ渡りて涼しき体を專によむ事、夏の海の趣也。此歌、只夏汗のけ
しきのみにて候ゆへ、春の海にもまぎれて夏の季甚よはく、不足に
御ざ候。

径女郎花

「(19ウ) (20才)

わけゆけば千種の中のをみなへし露にもなびく色ぞゑならぬ

(わけゆけば千種の野路のをみなへし露にもなびく色ぞゑならぬ)

夏舟

へよせかへる波まつなつの夕汗にみるめ涼しき海士の釣舟

へうなばらやはてしもなつの夕汗にみるめ涼しき海士の釣舟

「(20ウ)

涼しさはげに夏としもなかりけり浦こぐ舟を誘ふゆふかぜ
かならずと契る心にほとゝぎすたゞ一声の跡の名残に

和歌の道の友がきにて侍し藤間藤安のぬし身まかりにけるをいた
みて 百蘿

おしからぬ人のいのちはなき世にもわきてかなしきことの葉の友
「(21オ)

けふはみなつばさしほれてわかか浦に涙もよほす友鶴の声
右両首共に能く調、あわれ浅からず能候。

夏ごろ藤安身まかりにけるを野送におくりて
なきがらをおさむる野辺の夕ぐれは草の袂もいと露けき「(21ウ)

きへて行人ををくりて草の原つゆになみだの玉ぞかずそふ
両首共哀傷能く調候。

梅菊松となづけて和歌の会衆をわかち侍りしに、松のくみにて侍
りし藤間藤安のぬし「(22オ)身まかりければ

千とせへんことばの友とちぎりつる松もたのみのなき世かなしき
ちりうせぬ道のためしのかひもなくかれにし松のことのはの友

何れもく詞書歌ともに実情深き所より出候も「(22ウ)いち
しるく、情詞共に調誠よく、催余哀候。尤三詠草共に一紙の豎

紙に書つゞけられ候て手むけられ候はゞ、なき霊も無此上追福
と納受うたがひなく聞え候也。「(23オ)

秋月
へくもりなき名にこそ残れいく秋の月をめだけむ雲の上人

秋夢
へはかなしやけふめぐり来る七とせの秋もひと夜のゆめのまにして

「(23ウ)

へはてしなきむかしのことをみるゆめにおもへば秋の夜半もみじかき
いと珍らしく候。尤清書は此うたなるべし。

兩種共に能相調候間、弥此分に御決定可然候。懐紙短冊共格
別凡白へ詠遣間、遣来次第配分可仕候。「(24オ)

(見開き一丁抹消)
秋夢 夢

ゆふぐれの秋のこゝろも中くくに覚てはかなきあかつきの夢
(ゆふぐれの秋のこゝろも中くくに覚て淋しき夢の暁)

夕暮の秋のこゝろも中くくに淋しさまざる曙の夢
夕暮の秋とはいへど中くくに淋しさまざる曙の夢

(夕暮の秋とはいへど中くくに淋しさまざる夢の曙)「(24ウ)
夕暮の秋とはいへど夢に猶更行夜半の鐘の淋しさ

夕暮の秋とはいへどさまざまの夢に更行夜半の淋しさ
夕暮の秋とはいへど中くくにふけ行夜半の夢の淋しさ「(25オ)

寄道祝 常悦
かしこしな眼に見ぬ神の御心をうけてあらはす大和ことのは

孫を見て 紫式部
残し置て何れあわれと思ふらん子やまさるらん子はまさりけり

秋夢 季硯
「(25ウ)

秋の夜も猶ながれや夢ならでむかしにかへる道しなければ
夕暮の秋のあはれを思ひ寐の夢の袂も覚て露けき

(つもりこし秋のむかしを思ひ寐の夢のまくらも覚て露けき)

〔貼紙〕

へ秋の夜も猶長かれやゆめならでむかしにかへるみちしなれば
あはれ浅からずおもしろき御事にこそ。

「(26オ)

〔貼紙①〕(一紙を切断して①②とする)

秋の夕のあはれなると申は、感情おもしろき心にて、只一夕の景のみにて御座候。おもひ寐の夢に見るばかりの事にもあるまじくや。夢といへば深夜暁更の趣なるべきを、夕ぐれの哀をおもひ寐の夢に見たるおもむき、いかゞにや。むかしをおもひ寐として懐旧往事の歌に用ひ、又人をおもひ寐として恋の歌に多くよみ来れり。すべて

〔貼紙②〕

其事の至て深切なる事にこそ、秋の夕の哀は只一夕の金気のみにこそ、ふかく夢に見るの深切に至らん事、愚意にはいかゞと承侍候也。猶賢慮再考を希もの歟。

「(26ウ)

〔付記〕

本稿を成すに当たり、資料の調査と翻字掲載をお許しくださった手
銭美術館、掲載に際してご高配を賜った島根大学法文学部山陰研究セ
ンターに対し、心よりお礼を申し上げます。

なお本稿は、二〇二五年度の島根大学山陰研究プロジェクト及び国
文学研究資料館共同研究「手銭家蔵書についての研究」(代表 田中
則雄 島根大学教授)の研究成果の一部である。

The introduction of “Ayamenikki” owned by Tezen Museum (1)

KUBOTA Keiichi

(a professor emeritus of Hiroshima University)

[Abstract]

“Ayamenikki” is a note on waka poems written by Tezen Kiken. Kiken and his friends composed the Kizuki waka circle under the lead of Azukizawa Joetsu. This paper contains the first half of “Ayamenikki”.

Key words: Tezen Museum, Tezen Kiken, Azukizawa Joetsu, “Ayamenikki”, The Kizuki waka circle